高士山岡鉄舟

山岡鉄舟はよく「剣」「禅」「書」の人といわれる。剣は一刀正伝無刀流の開祖であり、日本剣流の本流である〃伊藤一刀斎〃の道統を明治の世に伝えた剣客であった。禅は剣の修行と同じように必死に打ち込み、ついに天龍寺の滴水禅師の印可を得て「剣禅一如」の境地に到達した。

書は少年時代、岩佐一学について入木道の書を学び、その後、弘法大師や王義之の筆跡を習い、剣禅一如の精神による自らの心を写す**鉄舟流**ともいうべき書の世界を立てた。入木道では「身心ともに忘れ、おのずから天地万物、一筆に帰するが妙」がなければ「書道を得た」とは云わないとされた。鉄舟は少年時代から剣・禅・書の三位一体の修養を積んだことになる。

鉄舟は揮毫を依頼されると気軽に書いた。その膨大な量の墨痕は全国各地に遺っている。勝海舟や高橋泥舟は自重して揮毫は少ない。ある人が「先生のように無造作にご揮毫なさっては、書の値打ちがなくなります」と注意すると、鉄舟は「わしは揮毫するのは、依頼した人の望みを空しくするのがいやだからで、書を売る考えは毛頭ない」と応えた。年譜によれば明治二十年、旧忍藩主松平家の借金四万五千円の返済のため、四万五千枚を揮毫し、旧藩士民に一枚一円の醵金を求めて救済している。

●江戸無血開城の立役者

慶応四年一月、鳥羽伏見の戦いに敗れた徳川慶喜は江戸へ帰るや「朝敵」の汚名を恐れ、上野寛永寺に入って専ら恭順謹慎して朝命の下るのを待った。一方、徹底抗戦を叫んで彰義隊が上野山内に集結し、江戸の町は甚だ不穏な情勢下にあった。そんな中、慶喜は警護に当たる遊撃、精鋭の二隊を率いる高橋泥舟を招いて、「自分の恭順の気持ちを大総督府へ伝えてほしい」と頭を下げて頼んだ。泥舟が出立の仕度をしていると、慶喜は「お前がいなくなったら、主戦派の旗本連中を押さえる者がない。誰か、代わりに行ってくれる者はいないのか」と相談した。泥舟はあれこれ考え「この大役を果たせる者は義弟の山岡鉄舟のほかにありませぬ」と答え、すぐに鉄舟を呼んで、慶喜から直に命令を下してもらった。鉄舟は慶喜の「二心はない。朝命に絶対にそむかぬ」とその心底を確かめると、勇躍、その大役を引き受けた。

鉄舟は出発に先立ち、勝海舟を訪ねた。勝とは初対面だった。勝は「成功は難しいだろう。お前の存念はどうだ？」と問うと、鉄舟は大喝一声「御身は軍事総裁ではないか。ここに至って何をくずぐず考えいるのか。今日のわが国において幕府も薩州の差別はない。挙国一致だ。四海一天だ。天業回古の好機は今だ」と訴えて、勝を同意させた。そこで、海舟が「官軍の営中へはどうして行くか」と聞くと、鉄舟は「臨機応変だ」と答えたという。

鉄舟は同行を乞うた旧友益満休之助（尊皇攘夷党）と東海道を西へ向かった。六郷を渡ると官軍の先鋒部隊が屯していた。鉄舟はその中を平然と通行したが、

誰一人誰何する者はなかった。まったく無心のまま、すいすいと進んでいく。途中、隊長の宿営らしい家に案内も乞わずに立ち入り、隊長（篠原国幹）に会うや、大声で「朝敵徳川慶喜家来山岡鉄太郎、大総督府へ通る」と断わったところ、徳川慶喜、徳川慶喜と二度ほど小声でつぶやいた。そこに百人ばかり詰めていたが、誰も声を立てなかった。まさに剣の気合であろう。

さらに進んで、神奈川宿辺にくると長州の兵が固めていた。そこでこんどは益満が先に立ち、「拙者は薩摩藩士でごわす。所用あって駿府の大総督府へまかり通る」というと、どの隊でも礼を厚くして通してくれた。

こうして二人は昼夜兼行で駿府に到着したのは三月九日。すぐに本営へ赴き、西郷隆盛に面会を求めた。鉄舟は全生命を投げ出して、慶喜の恭順謹慎を告げ、朝敵征討の回避を訴えた。西郷は黙って聞いてるだけで、容易にはウンといわなかった。鉄舟は一膝進めてこういった。「慶喜の心をお受け下さなれれば致し方ありません。私は死ぬだけです。そうなると、いかに徳川家が衰えたりとはいえ、旗本八万騎の中で決死の者は鉄太郎一人のみでござらぬ。それでは日本はどうなりますか。それでも江戸へ進撃しますか。それならもはや王師とは申せません。敢えて討伐するなら、天下は大乱となること火を見るよりも明らかでござる」と切り込んだ。

西郷は「お蔭で江戸の事情もよく判りました。ご趣旨を大総督宮（有栖川宮）へ言上しますから、しばらくここで休息ください」と言って席を立った。

やがて、西郷が戻ってきて、大総督宮からの五箇条の条件を示した。

一、城を明け渡すこと

二、城中の人数を向島へ移すこと

三、兵器を渡すこと

四、軍艦を渡すこと

五、徳川慶喜を備前へ預けること

とあった。鉄舟は一読すると「謹んで承りました。四箇条は異存はありませぬが、主人慶喜を備前へ預ける一条は、何としても承服できません」と抗議した。西郷は語気を強め「朝命ですぞ」と大上段から浴びせた。が、鉄舟は怯まない。「それならば先生、先生と私と立場をかえてお考え下さい。もし、島津公が誤って朝敵の汚名をきせられ、謹慎恭順しているにもかかわらず、朝命として島津公を他家へ預けて、先生は平然としておられますか。私は君臣の情において到底忍びがたいものです」。西郷はしばし黙っていたが、決然として言った。

「わかりました。徳川慶喜どののことは、吉之助一身に引き受け申した。必ず心痛無用でござる」

こうして、慶喜の救済と江戸無血開城は西郷隆盛が鉄舟に約束したのであり、三月十三日、芝高輪の薩摩屋敷での西郷と海舟の会見は、いわば儀式のようなものであった。

のちに西郷の格言に「**生命も名も金もいらぬ人**は始末に困る。そんな人でなければ、また天下の大事は成らぬものです…」とあるのは、山岡鉄舟を評したものといわれる。（『南洲翁遺訓』）

●一刀正伝無刀流の開眼

鉄舟は九歳で久須美閑適斎に神陰流を学び、十六歳で切紙を授けられた。十七歳のとき、北辰一刀流の井上八郎清虎に入門し、高山から江戸へ戻るとお玉ケ池の玄武館（千葉道場）に通い、井上八郎にも師事した。

鉄舟は何事も真摯で熱心であった。十九歳で山岡静山に剣術を学んだ。鉄舟の猛稽古は有名で、小野鉄を〃鬼鉄〃と呼ばれ、また〃襤褸鉄〃ともいわれた。

二十歳で井上八郎から北辰一刀流中目録免許を受ける。この年、静山が急死。鉄舟はその妹英（ふさ）を娶って山岡家を継いだ。静山の弟は槍の名人・高橋謙三郎（伊勢守、号は泥舟）である。

翌安政三年、講武所（幕府の武術道場）が落成し、鉄舟は世話心得になる。剣術は一向に進まず、とにかく粉骨砕身精励する。二十四歳、一週間一日立切二百面の数試合を行なう。

元治元年二十九歳の時、運命の男と出会う。一刀流の浅利又七郎義明である。鉄舟は浅利に試合を挑んだが、何度やっても遥かに及ばないことを識り、心服して師事する。浅利は相手と立合うと「わたしが勝ちました」という。その腕の差がわかる者は竹刀をひくが、それがわからない者は怒って打ち掛かると、浅利にこっぴどく打ち据えられた。

鉄舟は浅利に木剣試合を挑む。浅利の剣がぐいぐいと迫ってきて鉄舟は道場の壁まで追い詰められる。ある時、浅利の剣に押されて道場の外へ出された。すると浅利は板戸をピシャと閉じて奥へ入ってしまった。それほど浅利は強かった。

鉄舟は工夫・研究を凝らし、持ち前の体躯（身長六尺）で猛烈な修行を重ねたが、浅利前には手も足も出ない。この間、鉄舟は、西郷隆盛との会見、徳川家の静岡藩へ移住および参政就任など国事に奔走した。

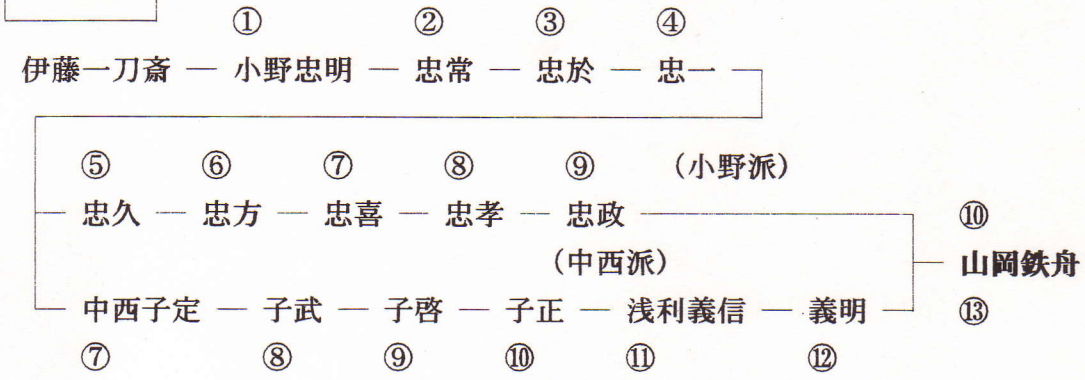
しかし、剣の修業は一日たりとも怠らない。「浅利に勝利せねばわが剣は死物なり」と、朝に夕に浅利打倒の執念を燃やし続けた。剣をとって構えると浅利の幻影が迫ってくる。これをどう打ち破るか、鉄舟は天龍寺滴水禅師に参禅。「両刃交鋒不須避」の頌を授けられる。

かくて、明治十三年三月三十日の早天、豁然として大悟徹底し、剣前に浅利又七郎の幻影が消えた。浅利と立ち合った文久三年から、十七年の歳月を苦心修練した結果、ついに「**両刃を交うるや、眼前に敵なく、剣下に我れなく、乾坤を独歩するような衝天の意気**」の無敵の極所に達したのである。

直ちに、鉄舟は浅利の下に車を走らせ、浅利を招聘して試験を受けた。浅利は「大いに妙理を得られましたな。もはや私はあなたの相手ではない」と言い、伊藤一刀斎景久の極意をすべて伝授した。鉄舟はその遺範を遵守して、新たなるものは作らず、事（技）理（心）の術を開いて「無刀流」と号した。

明治十七年、小野派一刀流の九世小野忠政から一刀流十世の嫡伝とされ、家伝の秘書ならびに「瓶割刀」を伝授された。ここに伊藤一刀斎の奥儀伝書はすべて山岡鉄舟へ伝承されたことになる。

系統略譜



鉄舟はすなわち小野派十代、中西派十三代となるわけだが、**一刀正伝無刀流**を開いたので、小野派とも中西派とも名乗らなかった。瓶割刀は鉄舟死後、夫人英子が日光山神庫へ納めたという。

正伝というのは、元祖一刀斎から小野忠明に伝え、代々に伝わった剣の奥義に少しも他のものを交えず、そのまま相伝した〃正しき伝〃という意味である。

一刀流は、小野忠明の長男忠也は師の伊藤氏を継ぎ、伊藤典膳忠也という。これを忠也派（ちゅうやは）といい、この系統に吉田流、溝口派一刀流、甲源一刀流があり、小野忠一門から中西派一刀流などがある。

鉄舟は小野派、忠也派の門下に発生した一刀流諸流には誤りが多く、小野家に伝来する一刀流こそ〃正伝〃であり、本流だとしたのである。

無刀とは、「心の外に刀なしという事にて、三界唯一心なり」と説明する。
（年譜下の無刀流剣術とは？を参考）
「天地と同根、万物と一体の自己本来の面目を観破して、それが、単なる『理』に落ちず、如実に剣技の上にその『用法』を現わすのが鉄舟の剣道で、彼はそれを無刀流と号したのである」（**大森曹玄『山岡鉄舟』**）

＊　＊　＊　＊　＊

●鉄舟の愛読書『田舎荘子』……猫の妙術……

鉄舟の愛読書の一つに『田舎荘子』がある。多くの剣術書や蔵書は門弟に自由に貸し与えたが、何故か『田舎荘子』だけは貸してくれなかった。

著者は関宿の久世大和守の家臣で旗奉行三百石の丹羽十郎右衛門忠明。神・儒・仏三教に通暁し、特に老・荘・禅に詳しかった。この人、筆名を佚斎樗山（いつさいちょざん）といい、また可渓とも号した。一般には、この『田舎荘子』と『天狗芸術論』の著者として知られている。寛保元年（１７４１）に八十三歳の高齢で、藩地関宿で没した。その『田舎荘子』の中に「猫の妙術」と題し、古猫が剣の極意を説く一編がある。

ある所に勝軒という剣術者がいた。その勝軒の家に一匹の大鼠が住みつき、昼間から座敷中を暴れ回る。そこで、近所から猫を借りてきて追い入れてみたが、

どの猫もその大鼠には歯が立たない。

業をにやした勝軒先生、自ら木剣をひっさげ、ただ一打ちと挑んだが、大鼠に巧みにかわされて、いたずらに座敷の襖や障子をたたき破るだけ、下手をすると鼠に顔や手足を引っ掛かれそうになる。鼠との一騎打ちに疲れ果てた勝軒先生、汗をふきながら一息入れていると、ふと六、七丁も先に「無類の逸物の猫」がいるという噂を思い出した。使いをやって、かの古猫を借りてこさせたが、一見して勝軒先生はガッカリした。

「形りこうにもなく、さのみはきはきとも見えず」、うすぼんやりした古猫で動作ものろく、まことにたよりない。それでも座敷の中へ入れてみろと、かの古猫を放り込むと、これまた何としたことか、今まで大暴れをしていた大鼠は「すくみて動かず、猫何のこともなく、のろのろ引きくはへて来りけり」という結果となった。

さて、その夜。かの古猫を上座に請じて、古今無類の猫族会議が開かれた。

まず第一に口を切ったのは「鋭き黒猫」である。「わたしは鼠を取る家に生まれ、幼少のころから、その道を修練し、早業軽業至らざるなく、桁や梁を走る鼠でも捕り損じたことはなかったのに、あの鼠だけはどうも…」と悔しがった。

古猫はこれに答える。「君の修練したというのは所作、つまり手先のわざである。だから隙に乗じて技をかけてやろうとして、いつも狙う心がある。古人が所作を教えるのは技法の道筋を教えるもので、形は簡単でも、その中には深い真理をふくんでいる。その真理や道筋を知ろうとせず、形式上の技をまねても、偽りの技巧になって、かえって害を生ずる。その点を反省して、よくよく工夫しなさるがいい」

次に、いかにもたくましく強そうな「虎毛の大猫」が話し出した。「わたしの思うには、武術というものは要するに気勢です。で、その気を練ることを心がけてきました。今ではそのため気が闊達至剛になり、天地に充満するほどになりました。その気合で相手を圧倒して勝ち、相手の出方次第で自由に応戦し、無心の間に技がおのずと湧き出るような境地になりました。ところがあの鼠は往くにも来るにも跡形がないので、どうにもわざのほどこしようがありませんでした」と苦戦の状を訴える。

「君の修練したのは、気の勢いにのっての働きで、まだ自分にたのむところがある。相手の気合いが弱いときはいいが、こちらより気勢の強い相手だと手に負えないのだ。君が闊達至剛で天地に充つると思ったのは気の象（かたち）であって、孟子のいう浩然の気とは似て非なるものだ。たとえていえば、孟子の浩然の気が利根川の本流ならば、君のは俄雨のとぶ水ぐらいのもので、相当の開きがある。そのどぶ水の気勢では、今日の鼠のように生死を度外視し捨身になったものには、歯が立たないのも当然だ」

少し年とった「灰色の猫」は、古猫の話に何度もうなづきながら聞き入っていたが、やがてしずしずと進み出て言った。

「まったく仰せの通りです。わたしはそこに気付いて、かねてから心を練ることに努力してきました。いたずらに気色ばらず、物と争わず、つねに心の和を保

って、いわば暖簾で飛礫を受ける戦法です。これにはどんな強鼠もまいったものですが、今日の鼠は何としてもこちらの和に応じません。あんな物すごい奴には出会ったことがありません」

「なるほど、君の和は気勢よりは奥儀を得ているにちがいないが、しかし惜しいかな、思慮分別から和そうとつとめているので、自然ではない。分別心から和そうとすれば、相手は敏感に察知する。わずかに思慮分別にわたって作為するときは、自然の感をふさぐから、無心の妙用など到底発揮できるものではない。そこで思慮分別を断って無心無為、感に随って動くという工夫が必要だ」

こういって古猫は、技・気・心の一辺倒的修行を一応みな否定したが、そこで語調をあらためて結論を下した。

「けれども、君たちの修行したことがみな無駄かというと、決して、そうではない。技といえども宇宙の真理の現れであるし、気は心の用をなすものだ。要はそれらが作為から出るか、それとも無心から自然に流露するかで、天地のへだたりができるのだ」

一同は声もなく聞き入っている。すると古猫は、

「しかし諸君、わしのいうところを道の極致だと早合点してはいかん。上には上があるものだ。むかし、わしがまだ若い頃、隣村に一匹の猫がいて、朝から晩まで何もせずいねむりをし、まるで木で造った猫のようだった。だれも鼠を捕ったのを見たことがない。けれども不思議なことには、かれがいるところにはその近辺に一匹の鼠もいなくなる。鼠が密集している所へ持って行っても同じで、たちまちに鼠の影も形もなくなってしまう。わしはかれにそのわけを聞いてみたがかれは笑うだけで答えなかった。いや、答えなかったのではなく、答えられなかったのである。かれこそはほんとうの己れを忘れ、物を忘れ、物なきに帰した神武不殺の境涯だ。自分などとてもとても及ぶところではない」

この問答を夢うつつで聞いていた勝軒先生、はたと膝を打ち、古猫に一礼し、「わたしは永年、剣の道を修めてまだその奥儀に達しませんでしたが、皆さんのお話を聞いて剣の極意を得ました。願わくばさらにその上の奥儀を示していただけませんか」と、いともいんぎんに請うた。

古猫は、最初は「われは猫なり、何ぞ人のことを知らんや」といっていたが、やがて、うんちくを傾けてとうとうと、蓄えず偏らず、敵もなく我もなく、物来たるに随って応じて跡なしという無物の理を説いていく物語である。

●鉄舟に**「大工鉋の秘術」**という文章がある。

柱をよくけづるには、初の**荒しこ**をつかふ稽古が第一なり。是れをよく遣ひ得れば**中しこ上しこ**も遣ふ事が出来る。されど上しこを遣ふに秘術あり。其の秘術と云ふは別の事でなし。心体業の三つを忘れて、只だすらすらと行く処にあり。

荒しこは、荒けづりで総身の力を込め骨を惜しまず十分に働く。

中しこは、総身の力ばかりではなく、手の内に加減ありて平らかけづる。

上しこは、むらのなき様にけづるなり。それは一本の柱なれば、始より終りまで一鉋にてけづらねばならぬ。

山岡鉄舟年譜　剣・禅・書の人

天保７年	１歳	小野朝右衛門高福の四男として江戸本所に生れる。幼名鉄太郎。母は磯。家禄六〇〇石。
弘化元年	９歳	久須美閑適斎に神陰流を学ぶ。
弘化２年	１０歳	父高福、飛騨郡代となり、鉄太郎も飛騨高山陣屋に入る。若様と呼ばれ、富田節斎の薫育を受ける。
嘉永３年	１５歳	岩佐一亭に書を学ぶ。
嘉永４年	１６歳	久須美閑適斎より神陰流切紙を授けらる。生母磯死去。
嘉永５年	１７歳	北辰一刀流井上八郎清虎に入門する。父高福死去。江戸へ帰着、小石川小日向馬場裏の長兄宅へ。
嘉永６年	１８歳	北辰一刀流玄武館に通い、井上八郎にも師事。
安政元年	１９歳	山岡静山に槍術を学ぶ。小野鉄を〃鬼鉄〃と訛り、〃襤褸鉄〃と呼称される。
安政２年	２０歳	井上八郎より北辰一刀流中目録免許を受ける。静山急死により、その妹英（ふさ）を娶り山岡家を継ぐ。静山の弟は高橋謙三郎（伊勢守・号を泥舟）。
安政３年	２１歳	講武所落成し、世話心得となる。剣法進まず、兎角敵に打たれがちになり、更に粉骨砕身精励す。
安政４年	２２歳	清河八郎を識る。
安政６年	２４歳	一週間一日立切二〇〇面の数試合を行なう。
万延元年	２５歳	清河らと「虎尾ノ会」を結ぶ。剣法上達するも不安心。
文久２年	２７歳	小十人上席浪士取締役を命ぜらる。
文久３年	２８歳	浪士隊を率いて上洛するが、清河の策謀ありて浪士隊を江戸へ連れ帰る。清河暗殺される。小普請入りとなる。
元治元年	２９歳	一刀流浅利又七郎義明が達人と聞き試合を挑むが、遥かに及ばないことを識り、心服して師事する。
慶応元年	３０歳	太刀の構えで巧拙を知るに至る。
慶応２年	３１歳	この頃から「鉄舟山岡高歩」と記す。
明治元年	３３歳	精鋭隊頭を命ぜらる。３月徳川慶喜の旨を受け、駿府へ赴き大総督参謀西郷隆盛に面接し、慶喜謹慎の衷情を申し立て、朝命五箇条のうち「慶喜備前へ預かる」の一条に反対意見を申し立て、誓約を得て江戸へ戻る。依って、西郷と勝海舟の会見をへて「江戸総攻撃」が中止となる。
明治２年	３４歳	静岡藩権大参事に任ぜらる。中条景昭ら精鋭隊士族は帰農し、牧ノ原台地を開墾。清水次郎長を識る（壮士之墓）。
明治５年	３７歳	６月侍従、１０月侍従番長に任ぜらる。
明治７年	３９歳	内勅を奉じて鹿児島に下り、西郷を訪ねる。
明治１０年	４０歳	天龍寺滴水禅師に参禅し「両刃交鋒不須避」の頌を授けら

る。宮内庁庶務・内庭課長などを勤める。
この前後より揮毫の量が増える。

明治１３年　４５歳　３月３０日早天、豁然として大悟徹底し、剣前に浅利又七郎の幻影を見ず。ただちに有栖川邸に車を走らせ浅利を招聘して試験を受ける。浅利いわく「大いに妙理を得たり」と。ここに**一刀正伝無刀流**が開眼する。
滴水禅師より印可を受ける。

明治１４年　４６歳　香川善次郎、籠手田安定が入門。宮内少輔となる。
牧ノ原に中条景昭を慰問、中条試合を挑み、その絶妙に驚嘆して師事する。

明治１５年　４７歳　「無刀流剣法修行規則」成る。道場名「**春風館**」。円覚寺開山・祖元の〃電光影裏春風を斬る〃の句による。

明治１６年　４８歳　春風館に於いて、「終日立切二百面試合」始まる。

明治１７年　４９歳　小野家九代次郎右衛門業雄から一刀流十世の嫡伝を受け、家伝秘書並びに「瓶割刀」を伝授される。

明治１８年　５０歳　無刀流に〃一刀正伝〃の四字を冠し「一刀正伝無刀流」とす。能登国永光寺復興の為、揮毫６５００枚。

明治１９年　５１歳　宮内庁御用掛を廃される。

明治２０年　５２歳　勲功により子爵を授けられ、二万円を下賜せらる。
旧忍藩松平家の借財４５０００円返済助成の為、揮毫４５０００枚。８月、胃癌と診断される。

明治２１年　５３歳　「鉄舟寺庫裏建立募縁　山本長五郎簿」を誌す。
従三位に叙せらる。病勢悪化。中条が牧ノ原から伊助を呼び寄せ揉療治をする。
７月８日門弟と最後の稽古を行なう。同１８日危篤になる
勅使ありて勲二等授けらる。
辞世「腹張って苦しき中に暁烏」
１９日午前９時４５分、担然結跏して死去。
法名・全生庵殿鉄舟高歩大居士。谷中全生庵に葬る。

●無刀流剣術とは何か？

それ無刀流の剣術は、人我剣撃の勝負を争わず。ただただ練心鍛術、自然の勝ちを取るを要するのみ。しかして、その妙術に至るとき、刀を振りて心外に刀なし。敵に対して目前に敵なし。縦横無尽、心をもって心を撃つ。これを電光影裏春風を斬るというなり。

茶園の剣聖・中條景昭　〔鉄舟の剣友〕

幕府崩壊後、徳川家は静岡藩七十万石の一大名となり、旧幕臣たちも十六代家達とともに静岡へ移住した。もとより、無禄（無給）を承知の上での移住であった。その数、二万数千名ともいう。かれらは伝手を頼って寺院や農家に分宿し、地元民から「お泊りさん」と呼ばれ、言うまでもなく竹の子生活を余儀なくされた。新しい生計を求めて、教育者、軍人、警察官、医者になる者、商売を始める者、山路愛山、塚原渋柿園のようなジャーナリストに転じる者、さまざまであった。

開墾事業に携わった人々も多かった。なかでも中條景昭の率いる精鋭隊士族の牧之原台地の入植が名高い。精鋭隊は将軍慶喜の護衛のために結成された剣客集団だったが、慶喜が静岡の宝台院に蟄居することになって、その役目を終えた。

しかし、その後の身の振り方に窮し、中條は剣友であり、親しい仲である静岡藩監査役の山岡鉄舟に相談した。山岡も無禄士族のことを心配しており、帰農したいという中條の要望を容れ、牧之原台地の開墾を勧めた。山岡は各方面に奔走して、当座の食い扶持と開墾資金を調達した。

明治二年七月二十六日、静岡藩は士族に対し牧之原開墾を命じ、開墾方頭に中條景昭を任命した。

中條景昭、このとき四十一歳。かれは文政十年、御小姓組中條市右衛門の子に生まれ、通称を金之助。家禄は三百俵だった。

剣は心形刀流を学び、のち一刀正伝無刀流に転じて達人と称された。文久二年に講武所剣術教授方となり、御小納戸役・布衣を許されている。

翌る文久三年には、幕府浪士取締新徴組支配、御徒頭となり、慶応四年、将軍慶喜警護の精鋭隊頭を務めた。

こうした赫々たる過去を捨て去って、帰農の覚悟を決めた中條は、二百二十五戸の士族を率いて牧之原台地に分け入った。開墾の鍬入れ式にのぞみ中條はこう決意を述べた。

「この駿河の地は神君家康公が今川氏の人質となり十余年間、われらの先祖はひたすら家康公の三河帰還を願って、飢餓に耐え、田畑を耕して困苦を重ねた。今や、われらは先祖の苦しみをわが苦しみとなし、あらゆる困難に耐えてこの地を開拓し国益となさん」と。

中條は白襷に鉢巻きを締め、腰に佩刀をおびた股立ち姿で鍬をにぎり、「エーイ」と掛け声をあげて地面に打ち下ろした。が、鍬は跳ね返ってきた。次に打ち下ろしたが土を引き起こすことができない。中條は手につばを付けて気合いを入れ、三度目でやっと土を引き起こすことができた。

見ていた士族一同はみな頬を硬張らせた。剣の達人の中條でさえ、このありさまだ。この台地の開墾が容易でないことを予感させたのである。

かれらの日常生活は、朝十時ごろから開墾作業に出掛けるのがふつうだった。遅いのはその前に剣術の稽古をやるからで、作業のときにも常に腰に一本差して

いないと、腰が定まらないと言っていた。

当初、一日に一戸で十坪の開墾を目標にしていたが、そうは容易くなかった。原野に入って草を刈り、木々を切り倒して根を掘り起こすという開墾作業は、剣術で鍛えたといえ、かれらには苛酷な重労働であった。体をこわして休む者が続出し、一ヵ月に十日も働ければ良いほうであった。

翌明治三年、最初の種蒔きを行なった。だが、だれも耕作の経験はないから、種の蒔き方を知らなかった。直径二米ほどの円形にまとめて種を蒔く者、点々と一握りづつ蒔く者など、バラバラであった。そのため茶の種が必要以上に消費されて、種の購入資金にも支障をきたし、生活を苦しめた。

開墾は数々の失敗や同志の反目・離反などの苦難をともなったが、それでも明治十一年までの十年間で、二百十七町八反八畝三十三歩の土地を切り拓き、一戸平均にすれば一町歩（三〇〇〇坪、年間三〇〇坪）の茶園の造営に成功した。

今日、大井川右岸にある大茶園がそれである。幾重にも広がる茶畑の一畝一畝は、中條ら旧幕臣たちの汗と涙の苦闘の成果である。

昭和六十三年島田市は、入植百二十年を記念し、中條景昭の偉業を讃えて銅像を建立した。銅像は東向きで、遠く江戸をのぞんでいるかのようである。

明治二十九年、中條は七十歳で没した。墓は茶園を下った島田市阪本の種月院にある。面白いことに中條の墓の後ろに、坂本竜馬を暗殺したという元京都見廻組の今井信郎の墓がある。

今井が牧之原に移住したのは明治五年だという。中條の開墾地谷口原の近くの奥まったところに一戸を構えた。刺客を恐れていたようで、玄関で一太刀で斬られぬように家の構造に工夫をこらしていた。

今井の後半生はまた波乱にとんでいた。明治八年静岡県十二等出仕、翌年十等出仕となり、八丈島に赴任。明治十年には内務省警視局一等警部心得として、西南戦争に参戦しようとしたが、戦争が終結して途中で断念、ふたたび牧之原開拓に従事した。

このころであろう。開拓士族の精神的シンボルとして〃牧之原東照宮〃建立の資金集めに奔走したが、大久保一翁や勝海舟が冷淡だといって腹を立てている。結局、開墾方で金一千円を集めて建立にこぎつけた。

明治十四年には「東海暁鐘新聞」を創刊。同二十二年には榛原郡初倉村議員となり、同三十九年、同村長となった。晩年は熱心なクリスチャンとして布教にも熱心だった。

今井は大正七年、七十八歳で没した。

●中條景昭の詩

安楽は本　無事に因りて得
功名は常に忌むも　心有りて求む　　志壑居士